

6章 考察

1 はじめに

山岳信仰に関する遺跡の調査事例は極端に少なく、山岳霊場内に所在する遺構認識の在り方はもちろんのこと、山中にはどのような種類の遺構が存在するのかという基本的事例を扱う概説書も皆無に近い。本報告書では山岳霊場として位置づけた三徳山中のうち、山頂部から南斜面側に位置する神倉地区の遺跡（後口山遺跡）調査の成果を整理して記載したが、この手の遺構を扱った経験が無いと記載内容を的確に理解することは困難なことと思われる。

この章では現地調査によって浮かび上がった課題を筆者の40年以上に及ぶ全国の調査研究事例と比較しながら考察を加えるものである。これには1.山岳信仰と巨石・磐座祭祀の問題、2.神霊依代としての「石鉢」の問題、3.サイトウ（柴燈・採灯）炉の問題、4.山中修行における「宿」の問題、5.雪穴（氷室）の問題 という5項目に分けて記述し、最後に当遺跡群の位置づけに言及したい。

2 各説

(1) 山岳信仰と巨石・磐座祭祀の問題 神倉地区にはランドマークとしての冠巖（写真5）がどっしりとした姿を見せている。これは凝灰角礫岩末端が浸食を受けて断崖となったものであるが、このような巖が山岳信仰にとっては基本的な聖性地形要素となる¹⁾。後口山遺跡内には、これほど大規模な巖は無いものの、標高700mに所在する上宮拝所推定地から始まる参道を下り、石段道が始まる起点には巨石が集中する広場が存在しており、磐座祭祀の場と考えられる（次年度以降の調査対象地）。「磐の座」と記すイワクラとは磐に垂迹した神の座で依代である。

湯地点の中心には神仏常住と認識された三徳山山頂部を背負うように所在する磐座1と、これを取り巻く石敷帯や集石等の遺構が集中しており、中世における磐座祭祀が湯地点の遺跡の根幹をなしていることが理解できる。最下部に所在する標高約590m地点に所在する大神地区の大神（狼）岩も華立と供物置き場の加工が施されているのが確認されたことから、水源地に伴う磐座祭祀であることが判明しており、三徳山における山岳信仰の根底に巨石・磐座があることが見て取れる。

磐座祭祀というと古代のイメージがあるのではないだろうか。ところが全国に所在する山岳信仰遺跡の調査を積み重ねてみると、むしろ山岳修験が盛んとなる中世、しかも中世後期（室町時代）が主流であることが浮かび上がってくる。磐座祭祀は古代が主流というイメージは世界文化遺産にも登録された玄界灘の孤島、福岡県沖ノ島に所在する磐座群の印象があまりにも強烈なことに加え、遺物が伴う場合には古代のものが、その多くを占めていることに由来すると考えられる。

ここで幾つかの事例を見ておこう。世界遺産にも登録されている三重県熊野市に所在する「花の岩屋」は神仏分離時に国家神道によって神社祭祀に根底からすり替えられた事例である。それ以前は「大般若の鼻（端・華）」という呼称が一般的で神仏融合の巨岩祭祀場であった。古くは10世紀頃活躍した僧で歌人の増基法師が、紀行文『いほぬし』で「岩屋の山に穴を穿って経を籠め奉る」「これは世に弥勒菩薩が現れになるときに取出して奉ろうとする経であり、天人が常に天から降りて供養し奉っている」「卒塔婆の苔に埋もれているものなどがある。傍らに王子の岩屋というのがある、ただ松が生えている山である」という記述が旧状復元の参考

となり、巨岩や磐座という自然崇拜のカミ祀りの場に仏法の經典埋納や供養が持ち込まれ、盛んになっていたことがわかる²⁾。

韓半島に接する国境の対馬には神社祭祀以前の姿を偲ばせる天童（天道）祭祀や山岳修験の霊場が幾つか残されている。南部の下島には標高558mの龍良山が所在し標高120mの低地のシイ林から高地のアカガシ林までの連続した照葉樹林が良好に残されていて日本有数の原始林として知られている。これは天童信仰により斧を入れてはいけないという禁忌が遵守されたからで、過去に祭祀に伴う堂塔や祠も一切設けられたことがない。山頂部は変成岩の露頭となり、最高地点の露岩全体を磐座として岩上には集石の祭壇とサイトウ炉（写真112・図99）が設けられており、複数の寛永通宝の散布が認められる。同じ下島の標高518mの白嶽は山頂部が白く輝く石英斑岩の男岩・女岩が向き合う双耳峰が特徴の霊山（写真113）であり、植生護持の禁忌が遵守されたことから大陸系植物と日本系植物の混生が見られる独特の自然植生が残されている。女岩は縦方向に亀裂が入った岩屋であり、最深部は祭壇を設けた祭祀場となっている。山中には巨岩の岩陰を利用した炉を伴う岩屋も存在していて天童信仰と山岳修験が融合した独特の景観を見せている。

標高1199m山岳霊場英彦山を中心とする中世「彦山」の活動域と文化圏は西日本最大規模である。その仲間組織の「彦山六峰」（福智山・普智山・蔵持山・求菩提山・松尾山・檜原山）は豊前国全域にわたって分布しており、「彦山四十九窟」という鎌倉初期には成立している岩屋を廻り参籠する独特の修行形態を展開する岩屋の聖地は、豊前国を中心にして豊後国・筑前国の三国に跨って分布する。その圏内の随所に現在は遺跡化した巨石崇拜・磐座祭祀の場が見られるが、そのうち特徴的なのが中世彦山四至の東方結界で、修験道思想に基づく「四門」のうち「発心門」にあたる大行事山の鳥居越を越えた中津市山国町中摩の磐座（写真114）を挙げることができる。これは磐座の正面に月輪に収まる阿弥陀如来の種子であるキリクを刻んだもので、彫込みの断面形が箱型になっていることから室町期まで下るものと考えている。同じく北方結界の蔵持山（彦山六峰の一つ）周辺域で伊良原谷を流れる彦山山系を水源とする祓川に所在する伊良原大行事社広前に続く川中に所在する磐座にも不動明王の種子であるカンマンのカンが刻まれていて、こちらは薬研堀の形態などから鎌倉期に遡るものと推定される（写真115）。

四国の事例では伊予国と土佐国の国境をなす山岳霊場「奈良山」（鬼ヶ城山系）の登拝拠点として14世紀前半に拓かれた山寺の奈良山等妙寺（旧等妙寺／愛媛県北宇和郡鬼北町）が所在するが、これを取り巻く尾根の稜線上では山中修行に関わる複数の遺跡を確認していて順次調査を進めている。内容には参籠宿・礼拝宿・修法壇・護法があり、この中には巨石・磐座が礼拝対象として中心に位置づけられている。各遺跡が機能していた年代は旧等妙寺境内の石積み技法が参考となり、等妙寺の盛衰と連動し14世紀から16世紀の範疇を想定している。本稿では参籠宿と考えられるヒコソウ岩屋の祭祀空間と回峰行路中の護法と推定している火頭尾根A地点の遺跡を紹介している。

これらに共通するのが、遺物が全く伴わないか、皆無に近いという点であるが、地域の拠点となる中世山寺と連動しており、その周縁部に設けられた行場や祭祀場である。このように巨石・磐座祭祀は山岳修験遺跡の基本となる重要な要素である。



写真110 神仏分離以前は「大般若の鼻」とも呼ばれた熊野「花の岩屋」
高さ45mの岩上からは「御綱」が渡され仏教儀礼の荘厳に使用される幡を象った三基の「三流の幡」が垂らされる。



写真111 「大般若の鼻」に寄り添う「王子の岩屋」
『いほぬし』に「ただ松の木が生えている山」と記載された磐座も熊野九十九王子の神霊が宿る磐座と認識されていた。



写真112 対馬龍良山頂磐座
山頂最高地点は変成岩の磐座となっておりその中心部で岩上祭祀が行われていた。



写真113 対馬白嶽山頂の女岩
男岩頂上より望む。巨大な女陰状亀裂の奥陰に祭壇が設けられている。

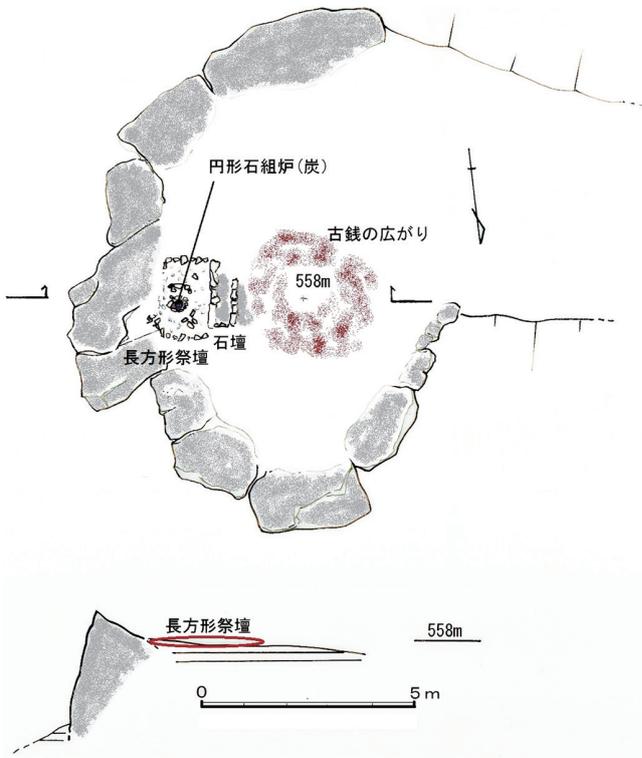


図99 龍良山頂の磐座

写真112に対応



写真114 彦山四至東結界内の磐座に刻まれた種子 中津市山国町中摩の梵字岩



写真115 彦山四至北結界に相当する祓川内の磐座に刻まれた種子 みやこ町犀川町上伊良原

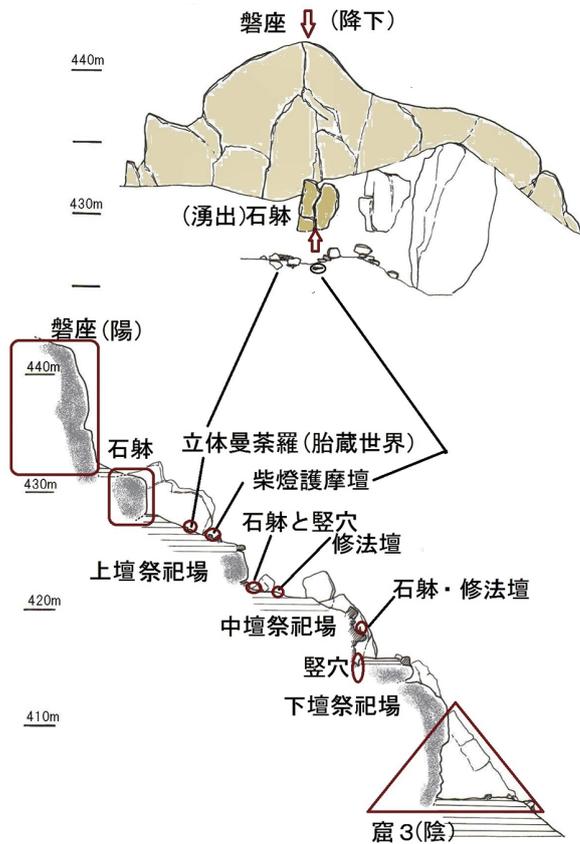
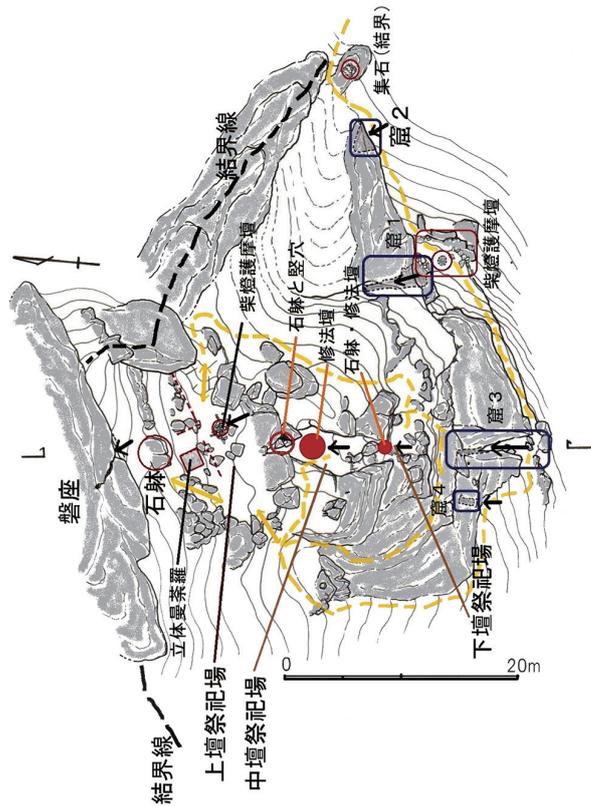


図100 「奈良山」ヒコソウ岩屋の構造

上図が平面、中央図が上部の側面、下図が断面。最上部の磐座上からだと最下部の窟（岩屋）まで比高差40mに及ぶ。中世の行場はこのように我々の想像を超える大規模な空間を構成する。

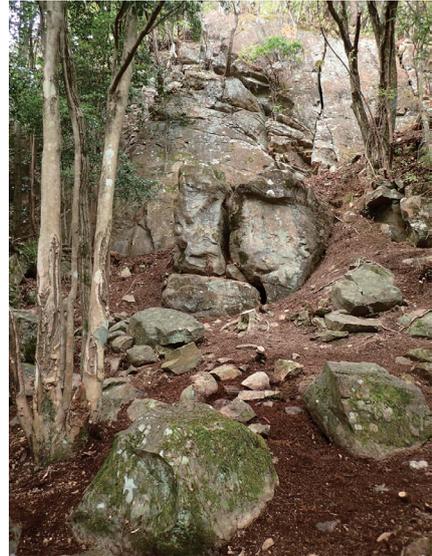


写真116 奈良山ヒコソウ岩屋の磐座と広庭の遺構群
広庭中央にはサイトウ炉が設けられている。



写真117 ヒコソウ岩屋の石躰
位置は図94の石躰・修法壇の所、集石を行った中央に先端の尖った石躰を据えている。



写真118 ヒコソウ岩屋磐座広前の集石遺構

(2) 神霊依代としての石躰の問題 祭祀対象の依代として仏教には仏像、中世神道には神像が存在するように、山岳修験の世界観には「石躰(せきたい)」と呼ばれる独特の石製依代がある。これは歴史上実際に使われていた用語で管見に及ぶ最古の資料が福岡県飯塚市庄内町筒野の権現谷に所在する養和2年(1182)「五智如来曼荼羅板碑」で彦山信仰に関する最古の石造物として知られている。石材は砂岩質で高さ146cm、両脇に大日如来三身真言と胎蔵世界五仏の種子がそれぞれ刻まれた自然石塔婆が並び三尊形式を取っている。

表面上段には五智如来、中段に胎蔵世界大日如来を主尊とする八葉種子と四天王種子、下段に法体・女体・俗体という三神三容の彦山三所権現像(図104)が刻まれており、背面には「勸進僧圓朝、奉立石躰、五智如来像、彦山三所権現、八葉曼荼羅梵字、現世末代行者修理、養和二年、歳次壬寅、八月初四日、壬子、時正中」と刻まれ、これが彦山三所権現垂迹の石躰として造立されたものであることが判明する。この石躰は現在 庄内川という小河川の河原に据えられているが、彦山三所権現の依代と記すからには、本来は隣接する筒野権現岩屋の石躰であったと理解するべきものである。

史料としては長寛勘文『熊野御垂迹縁起』(1163-4年)に「日本国鎮西日子乃山峰雨降給。其躰八角奈留水精乃石」と権現の神霊が彦山の八角形の水精石に垂迹したことを記す。この霊石は彦山開山の霊窟とされる般若窟(玉屋窟)内に所在する権現垂迹の依代である(写真121)。「石躰」という用語は鎌倉前期には成立していたとされる『彦山流記』及び宇佐宮弥勒寺学頭の神吽が正和2年(1313)に撰した『八幡宇佐宮御託宣集』に散見する。このような資史料と現地を突き合わせるなかで「石躰」が具体的にどのような物を指すのかを突き止め、全国に類似例を求めた結果、気付かれていないだけで普遍的なものであることが判明した。

その具体例を幾つか示すと、岩屋内の神霊依代には三重県熊野本宮の旧社地である大斎原と熊野川を挟んで向き合う位置に所在する通称「大黒島」の岩屋内に三角形の立石を据えている(写真122)。この岩屋は大峯入峰修行の一宿にあたる備宿の聖域を構成する一部でもある。熊野域では他に「ここより熊野権現の胎内」とされた五体王子の一つ中辺路の滝尻王子上の複数の岩屋内にも石躰が据えられており、これを管理した熊野本宮長床衆との関りが想定される。富山県立山連峰の最高峰、標高3015mの大汝岳山頂付近の岩屋内にも集石中央に石躰が据えられている(写真123)。大分県に所在する国東六郷山内の千燈寺奥之院には六郷山を開いたとされる伝承上の仁聞菩薩が入定したと伝える岩屋が所在する(写真124)。この岩屋は下窟が祭祀場で、上窟が入定窟とされる二階建て構造の岩屋であるが、窟内床面には集石を行い、中央部に石躰を立てている。

彦山神領守護の大行事社の依代として石躰が用いられる事例に福岡県朝倉郡東峰村の宝珠山大行事社本殿の床下には彦山三所権現の神霊を迎える三尊形式の石躰が据えられている(写真125)。発掘調査により見出された事例として愛媛県鬼北町に所在する等妙寺周辺山中遺跡群のうちヒコソウ岩屋内の集石祭壇の事例(図100・写真117)と「奈良山」火頭尾根A地点の祭祀壇(推定護法)南裾の「結界石」(図102・103、写真120)がある。愛知県豊橋市普門寺境内の薬師岩隣の磐座前に石躰を据えた石組祭壇が設けられている。ちなみに磐座上には盗掘を受けてはいたが巖上の窪みを利用した経塚の石室が確認されている。湯・イケガナル両地点にも石躰は所在しており、山岳霊場においては普遍的なものと言えそうである。

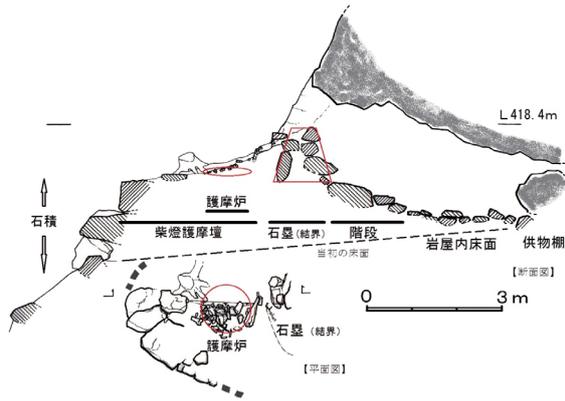


図101 岩屋前にサイトウ壇を設ける事例1
愛媛県鬼北町奈良山遺跡群内 ヒコソウ岩屋 岩屋を背負う形でないと修法をおこなうことができない構造となっている。



写真119 ヒコソウ岩屋のサイトウ壇
岩屋前の斜面に土留め石積を施し土を入れて壇を築きサイトウ炉を設けている。



図102 「奈良山」火頭尾根 A 地点遺跡
山寺である等妙寺を取り巻く山中の主尾根上の傾斜の緩やかな鞍部に設けられた大規模な壇状遺構で、壇の南北両端には折れの付いた階段状遺構を設けて結界をなし、その中(内道場)の稜線には複数の石組祭壇を設けている。このような修法壇は回峰行路中の護法と推定している。

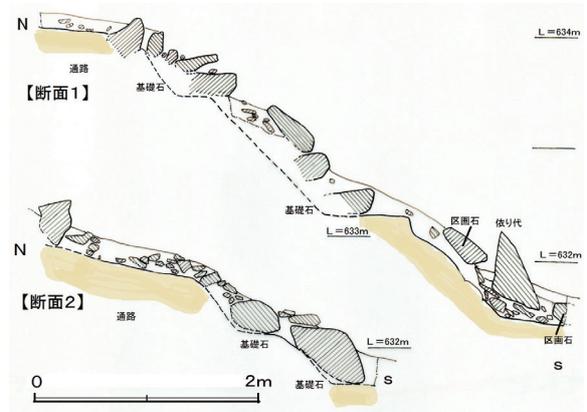


図103 「奈良山」火頭尾根 A 地点断面図
南斜面断面1・2 傾斜が急で結界外となる南斜面側には地山を削り出して土留め石列を設け、さらに末端には石躰を据えている。



写真120 修法壇南側結界護法の依代として据えられる石躰 火頭尾根 A 地点遺跡断面1 裾

高さ80cmほどの先端が尖った大型礫を護法(守護神)の依代として立てて据えたもので、基礎部分には方形に石組を行い固定している。



写真121 山岳霊場英彦山の秘窟 般若窟（玉屋窟）内の石躰（八角石）
福岡県田川郡添田町英彦山



写真122 岩屋の依代として石躰を据える事例
和歌山県田辺市本宮町備崎大黒島

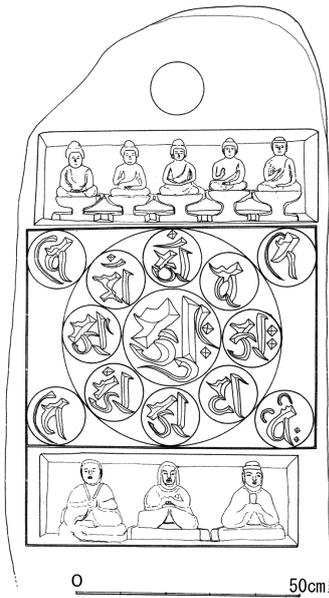


図104 五智如来曼荼羅板碑
実測図

筒野権現岩屋の石躰として据えられていたものと推定、上段に五智如来中段に中台八葉、下段に彦山三所権現神像、背面に銘文が刻まれている。

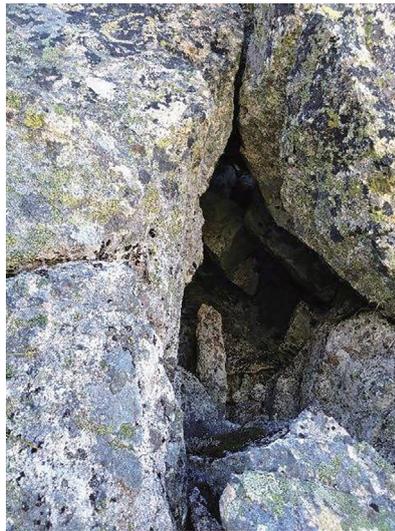


写真123 岩屋の依代として石躰を据える事例
富山県立山連峰大汝山頂岩屋



写真124 入定窟内の依代として石躰を据える事例
大分県国東市千燈寺奥之院 仁聞菩薩入定岩屋



写真125 彦山大行事社の石躰
福岡県東峰村宝珠山大行事社



写真126 石躰を中心に据え周りに石組を設ける祭壇の事例
愛知県豊橋市普門寺薬師岩

(3) サイトウ（柴燈・採灯）炉の問題 山岳修験の世界観においてはスギ・ヒノキ等の生木の枝を刈り払って軽く積み上げ、これに火打鎌を用いて燃やし、煙を立ち上らせ、祈りを煙にのせて神仏に届ける行為は頻繁に行われたようで、山岳霊場内において多くの痕跡を見出すことができ、これを護摩供養と称している。修験道独自の護摩儀礼に柴燈（採灯）護摩というものがある。護摩は古代インドのサンスクリット語で *homa* と呼ばれる古代火煙祭祀で、仏教やバラモン教、ゾロアスター教などにおいて行われた。仏教では大乘仏教の密教化の過程でヒンドゥー教から取り入れたとされ、密教をルーツに持つ天台宗・真言宗でのみ行われる。

護摩には屋内で行う内護摩と屋外で行う外護摩がある。仏教の護摩は炉を設けた壇を置き護摩堂など専用の建物で行う内護摩のみで、正面に不動明王を祀り、密教僧は炉を挟んで対面する。護摩木を火中に投げ火力によって煩惱や罪過を清め焼き尽くすものである。これに対し修験道の護摩は屋外に地面を僅かに掘り窪め円形に縁石（基本は直径80cm前後）を並べて簡単な炉や壇を設ける。壇は古くは神界に最も近い山頂や山中に設けられた。

英彦山周辺やこの影響を強く受けた愛媛県宇和郡の鬼ヶ城山系（奈良山）では、中世に遡る護摩炉や、これが岩屋や磐座を背負う形のものも複数確認しているのも、古くは仏教の護摩とは異なり山の神、権現の験力を背負い焚かれたものも認められる。

山岳修験や修験道の護摩は煙を立ち昇らせ、その煙に祈りを乗せるもので、仏教の火で煩惱を焼き尽くし浄化する護摩とは本質が異なり「神への狼煙」と理解するのがふさわしいので、筆者は護摩という表現を用いず、音だけの「サイトウ」あるいは「サイトウ炉」と表現している。当山派（真言系）・本山派（天台系）という教派修験道の教団が確立した江戸中期以降には常設で切石を用いた柴燈（採灯）護摩壇が設けられるようになるが、明治初期の神仏判然令や禁止令時に破壊されたものも多く、寺院内に現存するのは明治中期以降の新しいものが殆どであるのに対して、山中には遺跡化した夥しい数のサイトウ炉が埋もれている。

典型的な中世のサイトウ炉には愛媛県鬼北町の等妙寺周辺遺跡群の事例がある。例えばヒコソウ岩屋最上部の石躰前に設けられた炉（写真129、位置は図100）は円形に掘り窪めた中心部に陽石を据え、周りに縁石を並べるが、灰を掻き出す手前側には置かれていない。英彦山内や周辺域では岩上に礫を並べた池ノ尾宿の事例（写真130）、岩上炉から江戸後期に切石炉へと造り替えたものには彦山六峰の一つ檜原山の事例（写真131、図105・106）が、石組炉から切石炉に造り替えた事例に同じ彦山六峰の松尾山の事例（写真133～135）があり、華美なものへと変化している。



写真127 現代の柴燈護摩（京都市聖護院）



写真128 現代の柴燈護摩（滋賀県飯道寺）



写真129 ヒコソウ岩屋上段祭祀場のサイトウ炉



写真130 護摩焚岩上に設けられたサイトウ壇の事例

福岡県添田町英彦山池ノ尾宿の磐座前

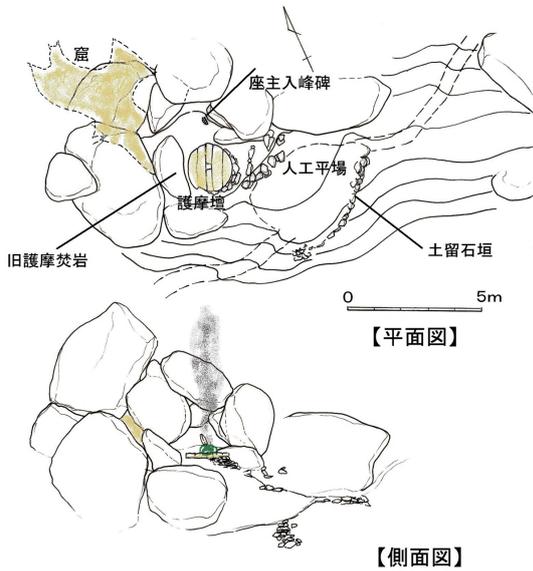


図105 岩屋前にサイトウ壇を設ける事例2

大分県中津市耶馬溪町檜原山内 金剛岩屋 このサイトウ炉も岩屋を背負わないと修法を行うことができない構造となっている。

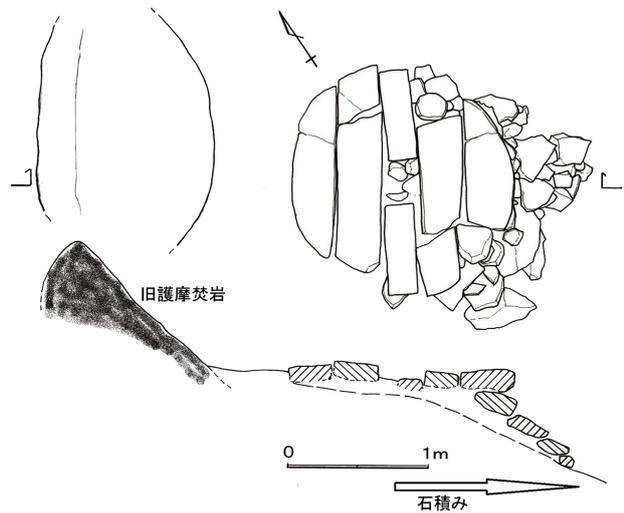


図106 護摩焚岩から壇へ変化する事例

檜原山内 金剛岩屋 護摩焚岩裾から、盛土を行い土留め石積を施して上面に切石を組み合わせた円形炉の構造へと変化している。

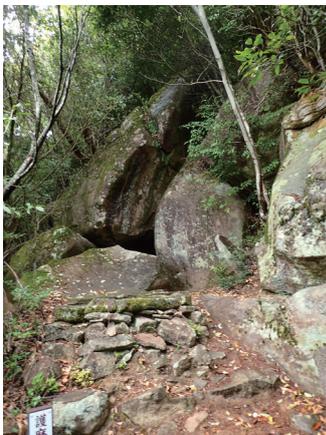


写真131 檜原山金剛岩屋前に設けられたサイトウ壇



写真132 英彦山大河辺墓地サイトウ炉

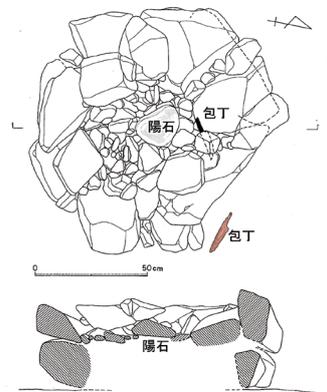


図107 基層修験(強力)墓地に伴うサイトウ炉の事例

英彦山大河辺墓地 中央に陽石、周りに縁石を巡らす構造となっている。



写真133 自然石積基壇上に切石でサイトウ壇を改修した事例
福岡県上毛町松尾山



写真134 炉の中心に設けられた納入坑 松尾山



写真135 宝珠型の陽石 松尾山



写真136 四角錐型の陽石 英彦山池ノ尾宿

特殊な事例として基層修験と呼ばれる強力層の共同墓地に設けられたサイトウ炉の事例として彦山^{おおこうべ}大河辺墓地の事例がある。これは元禄年間を中心に半世紀ほどの短い期間の墓地であるが、墓地全域と英彦山山頂部を正面に見る位置に設けられたもので、中央には陽石を据え、炉の周りに縁石を巡らせ、鬼門の方角に魔除けとして刃物（ここでは包丁）の刃を外側にして置いている。

基本となる炉の構造は最初に地面を皿状に掘り下げ、中央部は掘り窪めて地鎮の供物（洗米・熨斗アワビ・御神酒など）を納め、その上に陽石を据え、周りに縁石を配置するが、中世の炉は周りを完全に配置するものは少なく、まばらで炉の位置の目安にする場合が多い。陽石は、古くは自然石を用いるが近世後期から幕末にかけては切石に変わり彦山六峰のうち松尾山では宝珠型（写真135）、彦山池尾宿（写真136）や峰入路中の神仙宿では四角錐型が現存する。

山中遺跡を丹念に踏査したり、発掘を行うと、予想以上にサイトウ炉の痕跡が多いことに驚かされる。それは磐座前であり、大岩上であり、壇状遺構内であり、岩屋内では雨落ち線内であり、岩屋前の猫の額状の平場、入峰路中の拝所^{はなたて}（華立）というように、随所に見られ、それが山岳修験の山中修行や入峰修行の特徴と言えそうである。礼拝対象の眼前で煙を立ち昇らせて神霊に合図を送り、招いて修法を行い、終わると再び元の神界にお帰りいただく。そのような神霊の循環を行う装置であったと考えている。

（4）山中修行における宿の問題 「宿」というと宿泊施設を思い浮かべるだろうが山岳修験・修験道における「宿」には礼拝をおこなうだけの宿（礼拝宿）と、そこに籠って神と向き合う宿（参籠宿）の二種類があり、数の上では礼拝用の宿の方が圧倒的に多い。峰入り道の途中に設けられた宿には「神が宿る場（聖地）」という意味があり、天体における宿星の「宿」もこの意味に通じる。「宿」では神と共に籠ることで神と修行者が一体化を遂げるといった目的があった。

山岳修験や修験道の活動が行われた山岳霊場には無数の礼拝宿・参籠宿が存在するが、現地調査を行うには車で林道の終点まで辿り着き、あとはひたすら器材を担いで峰入り道を歩き、現地に到達するしかないという困難さが伴うため、これまでは状況把握すら殆んど行われてこなかった種類の遺跡であるが、奈良大峰山系では森下恵介氏を中心とする奈良山岳遺跡研究会の調査によって大峯入峰に伴う宿の具体的な姿が明らかになっている³⁾。筆者も長年にわたり英彦山の三季入峰に伴う宿をはじめ、美濃長滝寺を起点とする神鳩入峰、熊野本宮備宿の調査を行ってきた彦山の春・夏・秋の三季入峰に伴う宿をはじめ、美濃長滝寺を起点とする神鳩入

峰、熊野本宮備宿の調査と位置づけを行ってきた。

越中国・加賀国・飛騨国・美濃国・越前国の五箇国に跨る「越の白山」⁴⁾の登拝拠点には加賀馬場・越前馬場・美濃馬場の三馬場⁵⁾が所在する。このうち美濃馬場の白山中宮長滝寺は巧みに明治初期の神仏判然令を乗り越え、現在も中世以来の宮寺の状況を復元するに足る伽藍配置と景観が唯一残されている馬場⁵⁾である。

長滝寺は長く天台別院として本寺を持たない独立寺院であった。このため長滝寺の寺院組織の中でも白山山中を活動の舞台とする修験集団は独自の峰入り儀礼や次第に加えて組織を持ち、近畿の中央霊山とは多くの点で異なっていたと考えられる。例えば室町時代には「鳩居峰行者」と呼ばれる実践主体の行者集団が存在し、彼らは真言系の山伏集団の当山方に属した。

鳩居峰の峰入り経路は長滝寺境内の金剛童子社→入峰堂から始まり、白山と石徹白の境とされる神鳩宿との間には美濃国と越前国の国境をなす尾根稜線上に一之宿・二之宿・三之宿・多和宿・国境宿・千之宿・大日宿が、飛騨国と越前国との国境をなす尾根稜線上の行者道には中洲宿・こうはせ宿・神鳩宿の計10宿が設けられ、参詣道である美濃禅定道中には今清水宿など

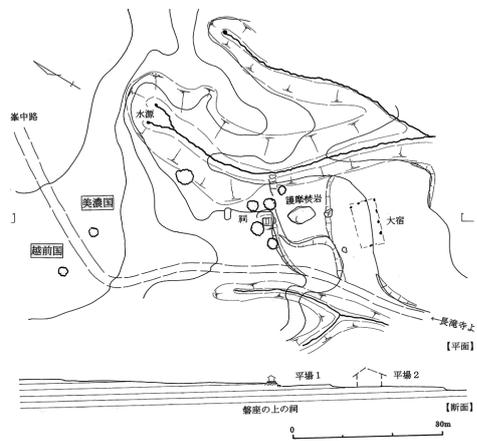


図108 国境宿の構造

水源+磐座(祠)+護摩焚岩+参籠所

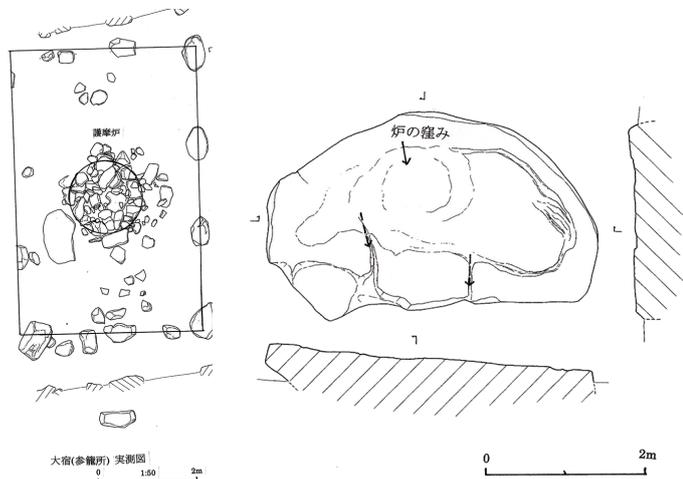


図109 国境宿の護摩焚岩

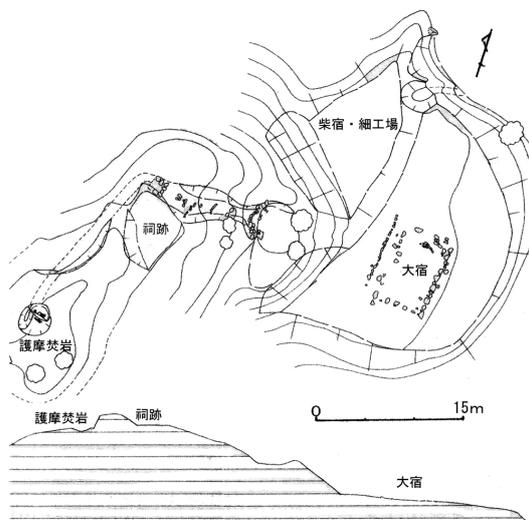


図110 今清水宿の構造

護摩焚岩+祠+参籠所+細工場+水源

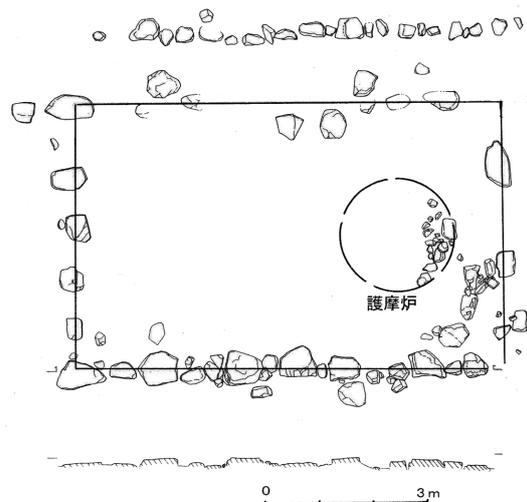


図111 今清水宿の大宿

屋内炉を持ち積雪を考慮して大ぶりの礎石を据えた板壁・板屋根の建物が設けられた。

18宿が設けられ、合わせて「神鳩二十八宿」と称した。二十八宿は殆どが礼拝宿で、明確な参籠宿は僅か4宿にすぎない。その代表例として国境宿と今清水宿を紹介する。

国境宿はその名のとおりに、美濃国前谷と越前国石徹白郷の境をなす「宿の平」と呼ばれる標高960m前後の平坦地に所在している。この宿は「長滝」呼称の由来である阿弥陀ヶ滝の水源となる湧水が信仰の根源となり、傍らの磐座上に祠を据え、前面には10m四方の平場を設け、中心に4×2.5m規模の護摩焚岩が据えられ、その前面には20m四方の平場を設け、中央には参籠所で行場となる二間×三間規模の大宿建物の礎石が並び、建物内中央には屋内炉の円形石組が残されている。宿周辺の植生は巨杉の株が複数集中しているのが特徴で、巨杉の森を護持することにより、参籠宿としての聖域環境が保たれている。

今清水宿は石徹白川上流左岸の斜面を上がりきった幅の広い尾根筋の斜面上、1040mの地点に所在する。その構造は最も高い1050m地点に護摩焚岩があり、その前面に祠跡、裾には参籠所で行屋となる五間×三間規模の大宿建物の礎石が並び、傍らには度衆ととしの詰所の柴宿、細工場を設けた平場を伴い、地形を巧みに利用した構造となっている。参籠宿の反対側には「今清水」「熊清水」と呼ばれる水源と、周りには杉の巨木が集中する杜が残され、その中に1957年に国特別天然記念物に指定された幹回り径約14.5m、推定樹齢約1800年の「石徹白大杉」が聳えている。周辺の植生はブナ林帯であるが、この一角だけは杉の巨樹が集中し、独特な宿の景観を形作っている。

長滝寺を起点とし、白山山頂部へと繋がる神鳩入峰の峰入り道は美濃国・越前国の国境をなす山並の稜線上をたどり、さらに飛騨国・加賀国の国境をなす山並の稜線上を延々とたどるものである。一般的に峰入り道は国境や郡境となる山並の稜線に設けられる。この境界線上の道は、本来、人間が支配できる領域ではなく、神が支配し往来する道であり、これを行者が通行することにより胎蔵世界立体曼荼羅の山々から金剛界立体曼荼羅の山々へ、逆に金剛界立体曼荼羅くにのみねから胎蔵世界立体曼荼羅の山々を廻る山中修行を繰り返すもので、これを「国峰修行」と言い、平安時代末期から鎌倉時代にかけての時期には国毎に一組から二組の金胎両部の立体曼荼羅が設定されていたのではないかと考えられている⁶⁾。

西日本最大規模の山岳修験霊場の中世彦山⁷⁾の山中修行には「大廻り」「小廻り」と呼ばれる廻峰行と、春峰・夏峰・秋峰という三季の峰入り修行が存在した。英彦山を胎蔵世界に見立て、西方の大宰府宝満山を金剛界に見立て、英彦山を起点に宝満山へと向かう春峰修行と夏峰修行が行われた。これに対して胎蔵世界英彦山から北方に所在する福智山系を金剛界に見立て、福智山系を起点に英彦山へ戻る秋峰修行が行われた。これは14世紀代前半には行われ、明治初期の神仏分離まで約500年間にわたり、世情不安定による中断や変遷などを経ながらも続けられた。両峰入りの経路は共に約130kmの行程で、それぞれに四十八宿ずつの行場が設けられ、峰入り修行のたびに十界修行⁸⁾が積み重ねられた。

宿間の距離は山中では約2km毎に設けられ、その場所は山頂ピーク・峠・岩屋・巨岩・滝・堂舎が充てられている。礼拝宿では読経・真言・札打などの勤行を行って通過するが、一週間程度の参籠修行を行なう参籠宿では先導役を務める先達や初参加の新客が三時の勤行⁹⁾と仮眠をとる「大宿」、強力を務める度衆¹⁰⁾の控所兼炊飯所の「柴宿」、峰入り修行の必要具などを調整する「細工場」から構成された簡素で清浄な建屋であったが現存するものは一つもない。

英彦山の事例として秋峰修行の参籠宿を紹介しておこう。彦山秋峰は35日間かけて行われる。7月晦日に英彦山を出発し里道をたどりながら三泊して金剛界福智山に登り山中の峰入り道を通して七日間で英彦山に戻り、その後は8月6日から池ノ尾宿で参籠したのち、9月4日に出峰している。

池ノ尾宿は秋峰修行では唯一の参籠宿で英彦山北斜面の宿谷と呼ばれる標高720~40m付近に営まれている。この宿の中心は大岩（磐座）が縦に三石重なる空間と岩陰で、磐座を聖域とし、その下方に人工の方形池、大宿・柴宿・細工場の三宿が建つ人工平場が設けられている。磐座Ⅰの岩陰には30cmほどの小さな石鉢（依代）が据えられ、背後には15世紀から17世紀に及ぶ、かわらけが納められている。磐座Ⅲは岩陰に1576年（天正4）の年号を刻んだ逆修板碑を最古にして複数の板碑が添えられ、サイトウの炉も2箇所で見られる。

下方の人工池は上面で11m四方の規模を持ち、谷側では高さ3~5.5m規模の堤防を築き石垣で護岸した本格的なものである。「池」とは氷池を指し冬季に雪を詰めて茅などの緩衝材で厚く覆い夏まで保存して氷を作る「雪穴」のことだと考えている。宿の名称になっているところからみて、宗教的な意味合いが強いようだが、残念ながらそれを示す記録は残されていない。

集団で峰入り修行を行なう山伏達が参籠宿を清浄にしていたことは良く知られており、護摩の灰も残さないように掃除を行い大先達自ら入念に検分したうえで立ち去ったので、参籠宿跡からは遺物の採取はまず期待できない。山伏による山中修行では要所で必ずサイトウという護摩を焚く、これは生木の枝を積み上げて燃やし、立ち上る煙に祈りを乗せるという烽火の役割があり、参籠宿にはサイトウの壇や炉の設置は欠かせない設備であった。

3章で紹介した湯地点のⅠ区には、それぞれの区画を代表する磐座Ⅰ・石積基壇（20号集石）・壇状遺構にこのサイトウ炉が設けられている。池ノ尾宿の構成要素は磐座群+サイトウ炉+参籠所+氷室（雪穴）からなっており、湯地点とイケガナル地点双方の構成要素は共通する。

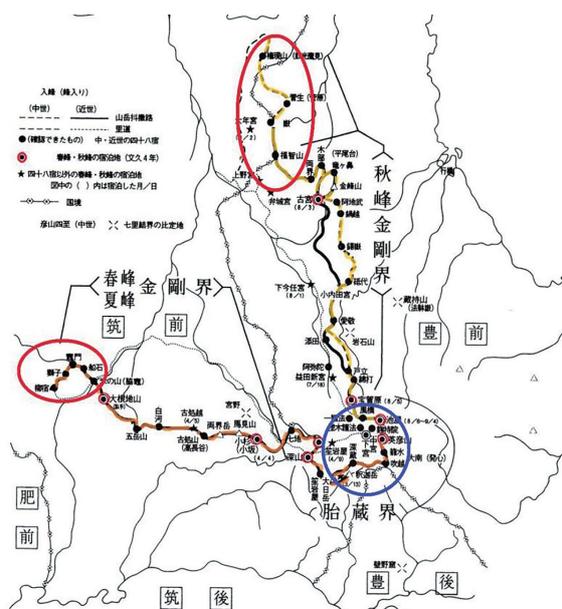


図112 英彦山修験三季の峰入りルートと金胎両部の配置
長野覚『英彦山修験の峰入り』『峰入』1994年より加筆引用。

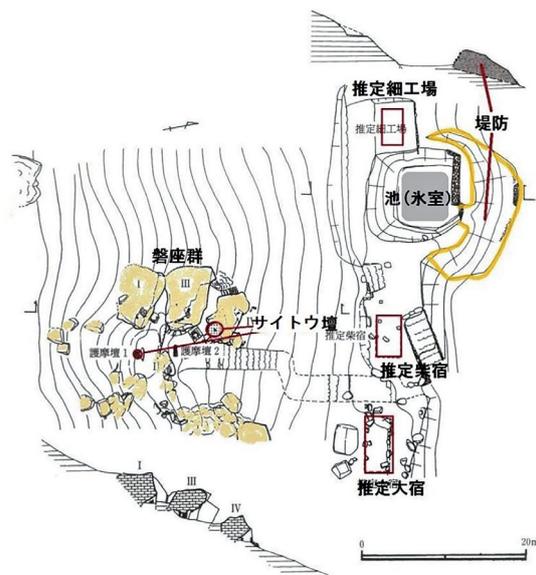


図113 池ノ尾宿の構造
神ごとでは標高の高さにより聖と俗の区別を付けている。大岩が折り重なる祭祀場の下に参籠所の建物が整然と配置され、その中には氷室が存在している。

(5) 雪穴（氷室）の問題 イケガナル地点の尾根稜線上に形成された南西から東北方向に延びる二本の細尾根と、これに挟まれた浅い谷地形の谷頭から谷中の窪地全面に対して石敷を行い、その中に口の字状とコの字状に礫を積んで囲った4基の石組遺構を発掘し、これに対して「雪穴」と呼ばれる氷室の可能性があるのでないかと指摘したので、氷室遺跡に対する認識の現状と若干の問題を整理しておく。

氷室遺構は発掘しても出土品が見込めないことから年代の特定や歴史的な位置付けが難しく、これをテーマとする研究は僅かにすぎないのが実情である。文献上の氷室記載の嚆矢は、『日本書紀』仁徳天皇62年条の鬪鶏氷室説話であるが、詳細な記載は『延喜式』主水司式「元要記」氷室社条にあり、律令制下においての基本は、気候を占う国家行事であった。平城宮に隣接する長屋王の邸宅から「氷室木簡」が出土したのを契機にプライベートな氷室の存在と、そこに記された「都祁氷室」の実態を探る研究が進んだ。

律令体制下から平安時代における古代氷室に関しては、大和都祁氷室に関する井上薫の研究¹¹⁾が先鞭となり、川村和正¹²⁾が奈良県内の調査事例をベースに文献史料と突き合わせながら総括し進めている。古代の氷室に関しては宮都の置かれた奈良県が群を抜いて説明が進んだ地域である。関東を中心とした発掘事例を集成した中山晋¹³⁾の研究も成果を上げているが、いずれも古代を対象としており、地域的にも限定されていた。これに対し氷室を全国的視野で通時的に総括したのが竹井巖¹⁴⁾で、管見の及ぶ限りにおいて最初の論考と言えるだろう。しかし基本となる氷室の調査事例は奈良・平安時代を中心とする古代と、近世以降のものに限られており、これを繋ぐ中世の事例と研究については、文献史学から越前一乗谷の氷室に関する

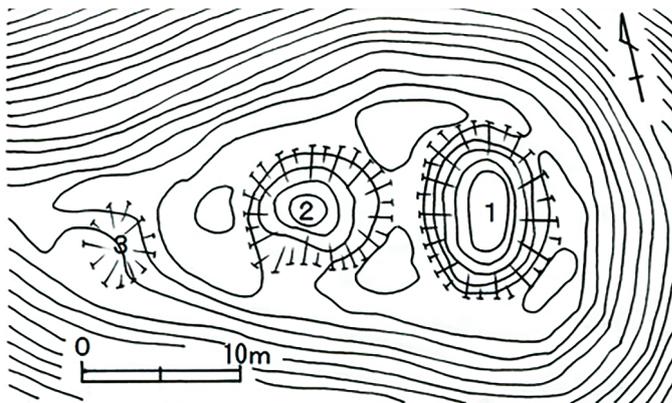


図114 奈良県天理市福住町室山の氷室土坑

古代都祁氷室の一つで立地は排水機能を考慮して尾根稜線上が微高地上の緩やかな場所である。土坑の形態は円形で、理由はわからないが3基一組で設けられ、隣接する場所に平らな水池を設け、そこに張った天然氷を切り出して上屋を懸けた土坑内に詰め、熱を遮断する緩衝材を屋内に詰めて夏まで貯蔵するものである。



写真137 都祁氷室豎坑



写真138 都祁氷室推定水池跡

左側尾根上に室山の氷室土坑群が設けられている。

佐藤圭¹⁵⁾による論考が特筆されるものの、これも遺構として認識できているわけではなく皆無と言って良い状況である。

天理市都祁は奈良盆地とは比高差約400m、温度差約3から5℃と冬季の水作りの適地とされ、主水司式直営の「大和國都祁氷室」に比定される。推定氷室跡は氷室神社の東南約400mの字室山の尾根稜線上に存在する。氷室神社と伝氷室跡・氷池跡が近接すること、平城京に極めて近いことなど諸条件を考証し、これを「都祁氷室跡」とした。古代の氷室は浅く平らな氷池に自然に張った氷を切り出し、排水を考慮して尾根筋に設けられた円形土坑内に納められ、茅等の緩衝材を屋内一杯に詰めて夏まで保管される。都祁では地域おこしとして古代氷室を復元し（写真139）、毎年氷出のイベントを開催している。

律令制の崩壊に伴い平安時代中期以降の摂関期・院政期に登場する受領国司によって中央の水願望が地方に飛び火し、各地で氷を作る技術や運搬技術が開発され、特に冬季に雪が積もる寒冷地では雪を踏み固めて夏まで保管する氷室（雪穴）が広がったものと考えている。

近世には各地に氷室が設けられているが、これを取り上げた研究は地域的に限られ、全体を俯瞰する研究はまだこれからである。北陸地方の石川県は加賀藩によって積極的に氷室が運用され江戸城にまで供給している。石川県は温帯に属するものの積雪が多く、雪を貯蔵して夏季に利用するための氷室が複数で存在したことが知られ、月浦町の氷室（図115）は金沢市近江町市場に氷を供給した事例である。

修験道霊山での氷室運用の事例として彦山秋峰修行の最重要宿である池ノ尾宿を紹介した。同じ豊前國（福岡県）の修験道霊山求菩提山内にも国史跡の氷室が設けられていて、氷が修験道儀礼において重要視されたようだが、これについては何もわかっていない。寺院に関連する事例として鳥取県内では三徳山内三佛寺側の千軒原北側斜面に「風穴」という場所が知られているが、これも雪穴形式の氷室でT字型に積み上げられた半地下式構造の石室（写真140・141）が残っている。大山寺にも金門に隣接する南光院谷に2基の雪穴が残されている。こちらは室内に雪を踏み固めて氷を作り、蚕の種を保存し春に残った氷を「大山水」として出荷したことが知られている（写真142）。この氷室（雪穴）は谷に並行する表面石積の堤防を設け



写真139 復元された都祁氷室



写真140 三徳谷千軒原の雪穴
雪穴自体は近世に遡るが石積構造は近代以降のものである。



写真141 雪穴入口の石積

て堰き止めた構造で、月浦町の氷室と同じ構造である。室の規模は21m×8.6m、深さ4mに及ぶ巨大なものである。

同じく山内の南光院谷の隅丸形の氷室（雪穴）は小規模な谷頭を塞ぐように堤防を築いて室を設け上屋を架ける構造で、近代以降に石積や盛土を行って規模を増し、氷生産の増量を図っている。構造上の特徴は、湿気抜きと土坑の隅の崩壊を防ぐため四隅に石積の暗渠（写真143）を設けており、これはイケガナル地点の石組遺構1の南西隅の石組構造に類似する点（写真144）が特筆される。

神倉 後口山遺跡イケガナル地点で認識した石組遺構群の性格を雪穴形式の氷室と仮定した場合、立地が尾根稜線上であることに加え小規模な谷頭を選んでいることから、都祁氷室のように古代的な立地と小谷の谷頭を利用する近世的な立地の両方を兼ね備えており、類例と具体的な構造が知られていない中世氷室の一端を窺うことができる希少な事例であると評価したい。

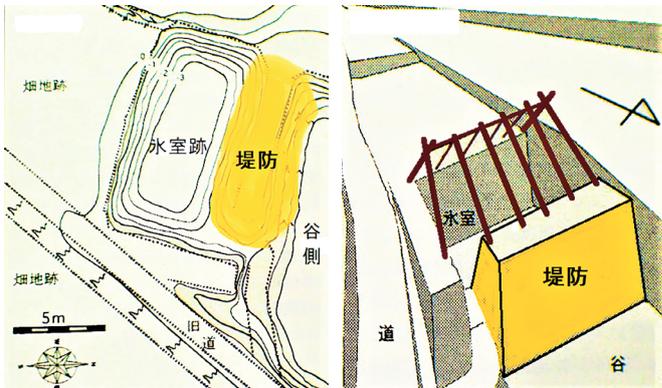


図115 石川県月浦町の氷室
右は復元イメージ、谷側に土塁を設け堰き止めた構造。



写真142 大正年間の大山寺の氷室（雪穴）
谷を堰き止める堤防を築く構造は月浦氷室と同じである。

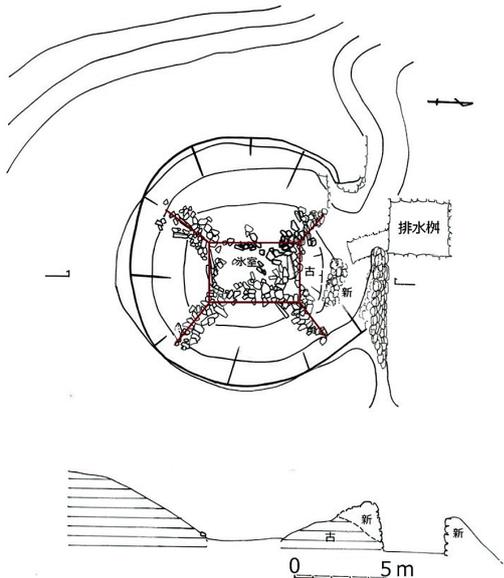


図116 大山寺南光院谷の氷室（雪穴）
室の周りに石積を行い四隅には放射状に暗渠用の石積を行っている。断面図に示したように近世の構造物（古）の上に近代になって石積技法を用いて増築し排水樹も加えている。



写真143 南光院谷氷室室内四隅の石組状況



写真144 イケガナル地点石組遺構1南西隅の石組状況

3 三徳山神倉後口山遺跡をめぐって

(1) 基本認識の在り方 本章2節で湯地点・イケガナル地点の二箇所の調査で見出した特異な遺構群の性格を検討するため、その解釈に有効だと考えた5つの課題について概説した。但し紙幅の関係で割愛した類似例も多く、理解するための十分な説明には至っていない。

近年の中世宗教史そして神仏融合史、さらに修験道史研究の進展は著しく、これらは連動しながら進められており、これまでの評価とは異なる見解も数多い。例えば宗教体系としての修験道の成立は13世紀後半とされ、これが教団化し組織化されるのは15世紀代であり、中世、しかも後半以降の宗教であるとされる。カミ祀りと仏教の融合が進み山岳密教が盛んとなる撰関期や院政期には、いまだ修験道は存在せず、主に天台寺門派、園城寺系の僧侶や聖により顕密仏教の一つとして山中修行や崇拜が行われていたわけである。

「修験道」なるものは鈴木正崇氏によると「教義よりは実践を主体にして在地の山岳信仰を基盤とし、外来の仏教、特に密教を意味づけに取り込み、中国の陰陽思想や神仙思想を選択的に受容して、日本の民間信仰と融合して展開した」¹⁶⁾と定義される。ここで肝要なのが「在地の山岳信仰を基盤とし」という目線である。つまり、「修験道」という統一された概念の世界があるわけではなく、地域にはそれぞれの気候・風土・景観・地形があり、それを基盤とする多様な山岳信仰が存在するのが実態であり、幕藩体制が確立し、修験道教団が成立する以前には地域毎に多様な在り方をするのが一般的であった。後に修験道の根本道場とされる大峯山系の山岳信仰の在り方を地域にスライドして、当てはめてきたのが従来の解釈であった。

この意味において、三徳山頂南面の神倉にタイムカプセルのように残されてきた山中の遺跡群を掘り起こし、意味づけを考える作業が実態解明には必要なのである。

(2) 遺跡の性格 三徳山山頂部を背負う磐座1を空間の中心に据える湯地点の遺構群は祭祀・儀礼空間 (I区)・参籠施設 (II区)・集石群 (III区) から構成され、I区には認識しただけで3基のサイトウ炉が存在する。1基が磐座1の直前、1基が石積基壇前、1基が壇状遺構の中心部というように、それぞれが異なる場に対して営まれるが、磐座1前は磐座に神霊を招くためのもの、石積基壇は壇状に祀られた礼拝対象 (箱笈に納められた神像や本地仏を想定) を供養する「湧出」の儀礼用、壇状遺構中央部に設けられた大規模で山頂部を遥拝する炉は灌頂道場としてのサイトウを焚く炉というように、使い分けが行われたものと理解している。

磐座+サイトウ炉・壇+参籠所+集石群 (顕彰) の組合せは彦山秋峰の灌頂道場である池ノ尾宿等と共通することから灌頂道場クラスの参籠宿ではないかと想定した。しかも『伯耆民談記』の記述(19頁)に従うなら伯耆国峰修行に伴

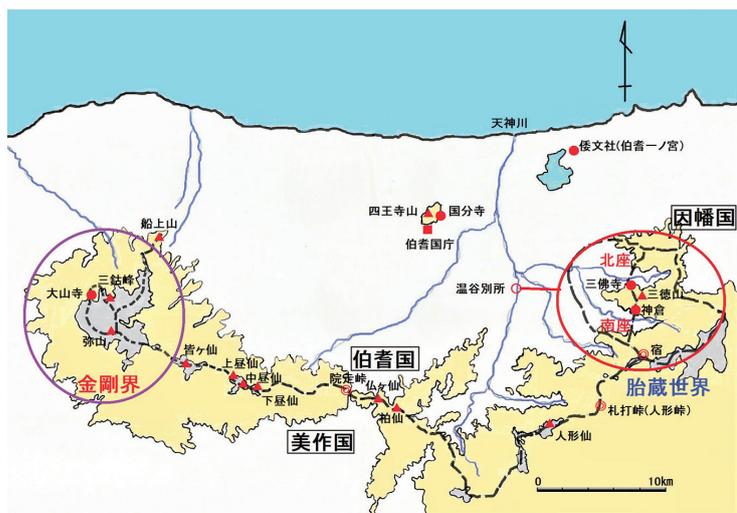


図117 伯耆国峰の曼荼羅配置と諸霊山との関係
春峰修行は金剛界→胎蔵世界へ 秋峰修行は胎蔵世界→金剛世界への抖擻行
起点、終点は一ノ宮となる。

う遺構群に該当するものと考える。

(3) 年代観 当該遺跡群最大の特徴は遺物を伴わないことである、密教儀礼や神祇祭祀に伴う山中祭祀や経塚形成にあたっては幾らかの遺物が伴い、年代の押さえが可能であるが、「修験道」という宗教体系が成立すると重層的な結界概念が遵守され、道場内では「塵一つ残さず、神に返す」という思想が意識されるため遺物を期待することはできない。これは中世彦山神領域や衛星的に取り巻く山岳霊場及び行場をはじめ、調査が進む南西四国鬼ヶ城山系でも同じで全国的な傾向である。しかも大岩を動かして土留めを行い、暗渠排水や堤防を築いて大規模普請を行い岩屋周辺や参籠宿本体の治水と保全を行っており、その年代観は石積み技法などから修験道成立期とされる15～16世紀であり、神倉の遺跡群もこうした一連の動向の中で理解しておきたい。

註記

- 1) 自然環境と人との関りの諸相を生業・技術・民俗知などを手掛かりとして研究する「環境民俗学」を構築した野本寛一の聖性を感じさせる景観が信仰を形成する根底に存在するという視点。『神々の風景 信仰環境論の試み』白水社1990年。
- 2) 『いほぬし』は熊野に関する最古の紀行文として史料価値は高い。花の岩屋は浸食されやすい流紋岩質凝灰岩からなり、特に裾部には細かな窪みが無数にあり、これに経典を納めたものと考えられる。「最古の神社」と喧伝されるが、神社の成立は律令期の神祇寮成立以後であり、社殿成立は仏像崇拜の影響を受けて神像が成立しこれを祀る建物が必要となる9世紀中頃まで下る。さらに経塚を設け経典埋納が隆盛になるのは12世紀代であるので、この記載の意味するところは、「カミ祀りの場（磐座祭祀）に盛んに経典供養と奉納が行われている」と読むべきと考える。
- 3) 森下恵介『吉野と大峰－山岳修験の考古学』東方出版2020年 でそれまでの大峰山脈における宿の調査と研究成果を纏めている。
- 4) 「加賀の白山」と称されることが多いが、白山連峰は旧国単位で五箇国、現在の県単位でも福井県・石川県・富山県・岐阜県の三県に跨る広大な山系である。「加賀の」という呼称は近世前田家中（加賀藩）の成立と関与によるものであり、寛文年間（1661－1673）までは「はくさん」ではなく、シラヤマ信仰にもとづく「シラヤマ」と呼ばれていた。
- 5) 越の白山の登拝拠点馬場と記して「ばんば」と読ませている。いずれも仏教寺院の本堂に該当する建物が無く社殿を中心にして長床形式の拝殿が伴い、仏教建築が建ち並ぶ宮寺様式の中心伽藍域を核にして、周りには坊や子院が建ち並ぶ宗教都市を形成していた。美濃馬場長滝寺は中世には「六谷六院 神社仏閣三〇宇衆徒三六〇房」と呼ばれるほどの規模を誇っていた。
- 6) 長野 覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』名著出版1987年。
- 7) 1729年（享保14）の霊元法皇の院宣により彦山に対し「英」の字を賜り、それ以後は「英彦山」と記すようになる。それ以後の事跡と地名は「英彦山」それ以前は「彦山」として使い分けられている。
- 8) 十界修行とは「華嚴経」に説かれる成仏過程で地獄（業秤）・餓鬼（穀絶）・畜生（水絶）・相撲（修羅）・人（懺悔）・天（延年）・声聞（比丘形）・縁覚（着頭襟）・菩薩（代受苦）・仏（床堅・正灌頂）の十段階とこれを習得する修行が存在する。
- 9) 三時とは初夜（戌刻／午後7時から9時頃）、後夜（寅刻／3時から5時頃）、日中（午刻／正午前後）のことでそれぞれに定められた読誦が行われた。
- 10) 度衆とは強力（ごうりき）、学術的には「基層修験」と呼ばれる下働きの者で、峰入り中での炊飯や道場の荘厳（飾付）などすべての準備を担う存在で、彼らの存在なくしては山中修行を実行できなかった。
- 11) 井上 薫『都祁の氷池と氷室』『大阪歴史学会ヒストリア』85, 1～30頁, 1979年。
- 12) 川村和正「都祁氷室に関する一考察」『龍谷大学考古学論集 I』251～267頁, 2005年。「都祁氷室の成立と変遷について」『(財) 由良大和古代文化研究協会研究紀要』10, 47～119頁, 2005年。「奈良氷室に関する諸問題」『国史研究』33, 114～145頁, 2019年。
- 13) 中山 晋「氷室研究の現状と課題」『(財) とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター 研究紀要』第9号, 225～240頁, 2001年。
- 14) 竹井 巖「日本における氷室・雪室の歴史文化とその現状」『北陸大学紀要』第52号, 321～341頁, 2022年。
- 15) 佐藤 圭「一乗谷と氷室に関する戦国時代の文献」『若越郷土研究』56巻2号, 12～24頁, 2022年。
- 16) 鈴木正崇『山岳信仰と修験道』春秋社、2025年。

報告書抄録

ふりがな	かんのくら うしろやまいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	神倉 後口山遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本義孝 河中文正							
編集機関	三朝町教育委員会							
所在地	〒682-0195 鳥取県東伯郡三朝町大瀬999-2 TEL0858-43-3518							
発行年月日	令和7年（西暦2025年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
—	とっとりけんとうはくぐん みささ 鳥取県東伯郡三朝 ちょうおおあざかんのくら 町 大字 神倉1175 ばんち 番地付近	313645	—	35° 22' 56"	133° 57' 36"	20140926 ～ 20241125	3,500m ²	保存目的 の確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項		
後口山遺跡	山岳信仰遺跡	中世後期	磐座、サイトウ炉、 壇状遺構、礎石立建物、 集石群、石組遺構群		なし			

要約	湯地点の遺構群（磐座、サイトウ炉、壇上遺構、参籠所跡、集石群など）及び、イケガナル地点の遺構群（石組遺構（雪穴形式の氷室跡と推定）など）から、中世後期の山岳信仰（伯耆国峰修行）に伴う遺構群と考えられる。
----	---

神倉 後口山遺跡発掘調査報告書

発行日 令和7年3月31日

編集・発行 鳥取県三朝町教育委員会
〒682-0195
鳥取県東伯郡三朝町大瀬999-2
電話 (0858)43-3518

印刷・製本 山本印刷株式会社